

義寂の浄土思想における身土観について

李 種 林

はじめに

浄土思想の中において最も重要視され、古くから中国語緒論師の間で、その配属をめぐって盛んに論争が交わされた問題の一角が阿弥陀仏の身土論である。韓国の新羅時代においてもこういった流れを受け、教育的な側面から接近することが主流となっている。そのなかで当時としては唯一、善導の浄土教学を受け入れ、独自色を打ち出し新たな展開をみせたのが義寂である。

ところで彼の弥陀身土観は複雑な構造で形成されているため、大変難解であるけれども、主として教育的な側面と凡夫往生のための側面がある。本論稿では、この両面を確かめることを主旨としたい。

一、発心位における弥陀身土観

義寂は弥陀身土の解釈に当たって、まず『無量寿経』と

『悲華経』所説の発心を比較検討し、『大智度論』の弥陀身土位置づけの内容にあて、

今以理准。宝蔵仏時所発心者。是信発心。於世饒王仏所。発後二種発心。王劫思惟以前発心。王劫思惟以後発心。……問若法蔵比丘時爾。已証発心者。何故論云。法蔵比丘。功德力薄。不能得見。上妙国土。是故阿弥陀国。不如華積世界。答国土勝劣不定。彼望上位所見。是故不如華積世界。爾時始登初地位故。又先為説二百一十億土。此時未登初地因位。

とあるように、『悲華経』に説く発心は、十信位にあたる信成就発心であり、『無量寿経』に説く発心には、四十八願を発する前に三賢位の解行発心である世間有漏発心と後に初地以上の証発心である出世間無漏発心の二種があるといつて、『大智度論』に弥陀浄土が華積世界に劣ると説くのは、法蔵比丘が地前修因のときの発心を指すものであるという。世自在王仏が法蔵比丘のために変現せられた十方浄土、つまり二百一十億の仏土を説くときには、地前の菩薩であつたため自

力では見ることができず、仏力によつてのみ見ることができると述べている。この文において示された義寂の発心位における弥陀身土の解釈は、変化身土に重きをおいたものであり、浄影世慧遠が主張する弥陀变化身土（応身土）説に基いたものと考えられる。ただし、『悲華經』と『無量寿經』所説の発心を『起信論』に説く三種の発心に関連づけたのは、彼の独自の見解であるといえる。

二、浄土教関係語論における弥陀身土観

義寂はまず、弥陀浄土を『仏地経論』に説く十八円浄のほか、『分量円満』の「周円無際」を『往生論』の「無辺際」に通じるものとし、弥陀浄土を受用・変化のいずれの浄土に攝めるかを説く『仏地経論』の内容に基いて、それは階位の所見によつて異なるもので、仏所変の浄土は一であるが、地前位は变化土とみるとし、地上の菩薩は受用土とみるとし、浄土を変化・受用の二土と定めるのである。

次に、『瑜伽論』七十九巻に説く密意説と『攝大乘論』の別時意説を『往生論』の「二乗異生不生」という説に関連させ、二論の密意・別時意説に示された弥陀浄土は受用浄土であるけれども、衆生の往生を説く面から見れば、発願のみによつて往生するものであるから、別時意であるという。『無量寿經』と『観無量寿經』所説は願行相応であるが、三輩九

品のすべての往生を説くのは変化浄土であるとし、『往生論』に、二乗異生などが往生できないというのは受用浄土説によるものであるとしている。この文における義寂の解釈は、法相唯識系、ことに窺基の弥陀浄土説に依拠したものであると考えられる。

三、四部經における弥陀身土観

義寂は浄土教関係經典を「四部經」という語にまとめ、以下の文にその弥陀浄土の相を表明するのである。

問此四部經所說浄土。為是一浄土為是有差別。答准論驗經。非一種也。所以者何。阿弥陀浄土有多品故。隨時所說有差別也。案文而求觀經及陀羅尼經所說土相。是化浄土。說九品人皆得生故。說有父母摩王等故。小阿弥陀經所說土相。是受用說故。彼唯有阿毘跋致菩薩故。又說多有補処菩薩……今此所說兩卷經中。頭受用土。論依此經。十七種莊嚴故……然兼亦顯变化浄土。說疑仏智等生彼受胎故。

この文にいう四部經の浄土の土相は、一浄土の相に攝めるものではなく、經典の説相によつて配属すべきものであるとし、『観經』と『鼓音声經』の浄土は、九品および父母などが説かれていたので、变化浄土に属されるものであるという。『阿弥陀經』については、阿毘跋致菩薩と補処菩薩のみ説いてあるから、受用浄土であると釈し、『無量寿經』所説の土相は

『往生論』に説く十七種の莊嚴が具わっている点からみれば、受用淨土であるが、疑智胎生説もあるので、変化淨土も兼ねるものとするのである。

四、凡夫のための西方淨土

いままで述べたのが所謂教学的な身土の解釈であつたとすれば、以下の記述は義寂の弥陀身土觀の総攝といつてもよいであろう。

此經所明即是阿弥陀仏。一方之所現也。創建勝因。則四十八願具足成就。終標妙果。則二十九德円満莊嚴。淨過三界。……極樂之稱其在茲乎。所以如來啓此沙婆苦多樂少³⁾。

阿弥陀仏が西方なる一方向を定め、勝因を立て四十八願を成就し、その果として三種二十九功德莊嚴を施して。娑婆世界に苦しむ衆生のために救いの手を差し伸べるという。つまり、弥陀淨土の定義は、凡夫往生のために説かれた淨土であることを強調するのである。ここに義寂の弥陀身土觀の立場が明瞭に表れている。この点においては、善導がいう、阿弥陀仏の酬因の報土説と、その淨土を依報・正報莊嚴とし、指方立相を説いて末代凡夫を導くためとする説と共通点があるといえよう。

五、おわりに

以上の諸考察を通して見る限り、義寂の弥陀身土觀は、教学的な解釈に重点をおいた場合に、弥陀身土そのものに意味をあたえるのではなく經典や論の説相によつて判断するのである。こういった点は中國諸仏、殊に窺基の説に影響を受けたものであるといえよう。いずれにしても、義寂の弥陀身土觀の帰結は凡夫救済であるといわねばならない。

1 『無量壽經述義記』卷中（恵谷復元本）『淨土教新研究』所収
四〇八頁

2 同右 四三六頁

3 同右 四一五頁

〈キーワード〉 新羅義寂・弥陀身土。凡夫往生

（仏教大学大学院）